四十五年に東京市長尾崎行雄が桜を寄贈した返礼として送られてきたアメリカ花水木は、山帽子に近い種類でアメリカヤマボウシの名がある、という。箱根の山法師は、同じミズキ科ではあるが、日本在来種で、近ごろよく見るアメリカ花水木とは別であるらしい。

*

## 石榴

中西　進

西山松之助先生が茶杓をくださったことがある。そのうちさし上げましょう、といっておられたかと思うと、あっという間に教授会の席上で頂戴した。そのしなりぐあいにいささか雄勁の趣があって、紫いろの底光りをもった逸品である。銘は「三番叟」。私は人間国宝の藤原啓さんから頂いた備前の茶碗をもっていたので、これにそえる茶杓を得たことで、大よろこびをした。

しかし、茶杓もさることながら、それをさりげなく包んでくれた紙は、淡彩で石榴二顆を描いたものであり、その見事さにも感じ入った。一顆を淡く、他の一顆をやや濃く、両者はほどよく調和しながら距離を保っている。石榴の実の強さをもちつつ、なつかしい筆づかいである。

茶杓とともにこの石榴図が私の宝となったことはいうまでもないが、その原因の一つに、こ

の図をみているとたぐりよせられる私の昔日があることも、否定できない。

私のこどものころ、家の庭には一本の大きな石榴があった。石榴の木は幹が白っぽく乾いた感じで、おまけに屈曲をもって生えていたから、何か人をよせつけないような風格を子ども心には与えていた。その上花といっても固い皮におおわれているから、およそ美しいという感じではない。その花はぼろぼろとよく落ちた。ふたしかな記憶でいえば大体一つか二つぐらいしか実らなかったのではないかと思う。程よく熟すと父親がもいで来て、食べるかという。すっぱいことをよく知っているから、私はかぶりを振る。すると実はしばらく父親の机の上とか書棚の上とかに飾られている。

今から考えることかもしれないが、中国文人的な印象をもった果実だった。いやこれは「万緑叢中紅一点」という詩の印象を後から与えてしまった印象かもしれない。しかし子ども心に石榴の存在がいかにも文人ふうであったことはたしかである。

やがて長じて大学生となった時、私は目白の鬼子母神が好きで、よく出かけたものだった。まだ赤い毛氈をしいた縁台が出ていて、みそ田楽などを食べさせたり、みみずく人形を売っていたりしたし、何よりもうっ蒼と茂る大樹の作り出す歴史の重さが独特の雰囲気を作っていたから、ぼんやりしているのにとてもよいところだった。

もちろん鬼子母神そのものに興味があったわけではない。境内にいきながらついぞ参拝すらしなかったのではないかと思うが、境内を歩き

ながら、鬼子母神が石榴を与えられて食べたという話はいつも忘れずにいた。だから本当にこの境内が好きだっただけかどうか、わからない。少年のころのあの石榴が無意識の内に尾を曳いていて、私をして鬼子母神へと歩かせたのかもしれない。

私に石榴のこんな思い出があるように、西山先生にも、きっと石榴の思い出があるにちがいない。ただゆきずりに出会う植物だったら、あんなに手の内に入れた図は描けまい。先ごろ出版された「しぶらの里」の解説で小木新造氏が、西山先生を花にたとえれば曼珠沙華だと書いている。理由は華麗で情熱的な感じがいかにも先生のプロフィールにふさわしいからだという。ならばあの真赤な分厚い皮がさけて、これまたルビーのような粒々がひしめいている石榴も、先生にふさわしい花だと思うし、さらにその上に、文人ふうなイメージが石榴にはあると私は思うのだから、なおのこと西山先生と石榴というのは、いい付け合いのような気がする。

先生はきっと石榴がお好きだろう。いつだったか、教授会で西山先生は手をあげて、本学のどこそこにこれこれの木がある。いつもその姿を見ているが、近ごろ弱ってきている。どうか保護の手をのばしてほしい、という意味の発言をされたことがあった。世上、あれほど評判が悪い教授会なるものの席上である。私どもの学部の教授会で、植物を保護してほしいと発言した人は私の記憶するかぎり前例がない。おそらくこれからもないのではないだろうか。この時私ははっとさせられ、気恥しくなるほどだった。それほど爽やかに快かった。

そんなに西山先生が愛してやまない自然の草木の一つとして、石榴はどのように愛され、どのような思い出があるのだろう。私はそれを知らないままに、頂戴した石榴のたたずまいから、あれこれ想像を楽しみ、ほのぼのとした気分になっている。

実ざくろや妻とは別の昔あり　　地内友次郎

*

# 西山先生と楊貴妃とヘンリー・ムアと

田中　日佐夫

一九七九年四月、私は西山先生たちと中国を廻った。まことに楽しい三週間の旅だったが、その間、私は西山先生の見事なばかりの行動に何回も驚嘆せざるをえなかった。いや、行動などというと、なにか重々しい人間の行為を想わせるが、そんなものではなく、実にいきな、さばけた仕方で旅を楽しんでおられるとお見受けしたものである。

まず、ところどころで目についた竹のもらい